

粘土の造形表現活動に関する考察

— 短期大学生に対する実態調査を通して —

A Proposal concerning a Formative Expression Activity of Clay: through a Survey to Women's College Students

井上 周一郎
Shuichiro Inoue

鹿児島女子短期大学

短大生を対象として、粘土の造形表現活動に関する実態調査を行い以下のことが明らかとなった。

これまでに学生が使用した粘土のうち、最も多かったのは紙粘土であった。続いて、油粘土、土粘土、加工粘土などの順であった。次に各粘土の主な使用時期について、小学校では紙粘土や油粘土、土粘土が高い割合で用いられ、中学校では加工粘土の使用が顕著に高かったことなどが特徴的であった。また粘土遊びが主体となる保育園や幼稚園においては、やはり油粘土の使用が多かった。

各時期で用いられる粘土には偏りが見られ、対応する制作課題においても同様の結果であった。子どもの健やかな成長のために、今後は幼児期における粘土遊びを発達の土台とし、彫塑表現を追求するような造形活動にいかに取り組んでいくかが課題になることがわかった。

キーワード：粘土、彫塑表現、造形表現活動

はじめに

美術の学習における現状として、彫塑表現を取り扱う事例が少ないと言える。教育現場の設備の問題や指導者の経験が浅いことなどが関係するものの、発達に応じた表現学習を適切に実施していかなければ子どもたちの成長に影響を及ぼすことになる。このことは、筆者が担当する本学の専門科目「保育内容（表現Ⅰ）」や「図画工作科教育法」等の指導においても実感する。実例を挙げると、紙粘土を用いて課題制作に取り組む際、制作体験が少なく戸惑う姿や発想が湧かずに手が動かない状況、団子やひも作りなどの粘土遊びで終わってしまう様子などが見受けられる。当然、高校までの学習内容や個人的な得意不得意によって差がでることは予測される。また制作課題の設定によっても学生の反応は変わってくると思うが、これらのことだけが原因とは考えられない。これまでに幾度となく消極的な姿勢を目の当たりにすると、児童期からの造形表現活動のみならず、発達の基盤となる幼児期においても粘土を用いた制作体験が不十分なのではないかと考えるに至った。

そこで本研究では短大生を対象に、粘土を用いた造形表現活動に関する実態調査を行い、幼児期から現在までの経験や関心などを幅広く把握する。ここでの結果を基に、各粘土の使用状況や制作課題などの現状を明確にして今日における粘土の造形表現活動の課題を明らかにする。また粘土による造形表現活動を苦手とする学生に対し、有効な制作課題の在り方についても考察を深め、今後の授業改善に繋げるものとする。

調査方法

1. 調査の対象、期間および内容

- 1) 対象 平成24年に短期大学の専門科目「図画工作」を受講した児童教育学科幼・保コースの1年生と小・幼コースの2年生 (242人)
- 2) 期間 平成24年10月～12月
- 3) 内容 調査対象者に研究目的を口頭で説明したうえで、粘土の造形表現活動に関する調査を表1の内容で行った。調査対象者242人中、239人の回答を単純集計した。回収率98.7%であった。

結果および考察

1. 様々な粘土を用いた造形表現活動

1) 紙粘土を用いた造形表現活動

学生が使用した粘土のうち、最も多かったのは紙粘土であった。学生全体の99.5%が使用したと回答し、ほぼ全ての学生が体験したことになる。そのうち小学校における使用が学生全体の90.3%、幼稚園では全体の20%、中学校では16.7%、保育所では12.9%であった。紙粘土は小学校での使用率が顕著に高いことから、小学生の主要な教材になっていると言える。

学生が取り組んだ制作課題について、明らかに多かったのは貯金箱の39.9%、ペン立ての23.1%であった。貯金箱に関する「どの程度満足できる活動であったか」の質問についても、「満足した」が73.6%で、その理由として「好きなものを自由に作れた」の30.6%、「実用的な作品を作れた」の26%、「絵具で着色できた」の25.2%、「完成後に飾れた」の10.9%などの肯定的な意見が目立った。割的には低かったが、動物の制作課題も挙がり、学生の24.3%が取り組んでいる。そのうち「満足した」の割合は60.3%、「普通」は39.6%であった。その理由として、「好きなものを自由に作れた」の89.6%、「完成後に飾れた」の22.4%であった。

紙粘土による制作活動の現状は、実用的な作品づくりが主な取り組みになっている。それなりに満足度も高いことから子どもの実態に応じた良い制作課題であると言えるが、やはり動物や人物などをモチーフとした制作課題が少ないのは問題である。今後、子どもたちがバランスよく学んでいけるように適切な制作課題を考えていく必要がある。今回、いずれの制作課題においても、「好きなものを自由に作れた」ので満足したという意見が共通して見られ、紙粘土を用いて自由に作りたい、という趣向が強いことが伺えた。そのため子どもの興味や関心を大切にしたいうえで、更にイメージを展開できるような幅のある課題設定が重要になると考える。

2) 油粘土を用いた造形表現活動

油粘土を使用した割合は、学生全体の95.3%であった。紙粘土の割合に比べて少々低いものの、ほとんどの学生が体験していると言える。使用した時期の割合は小学校の60.9%、幼稚園の59.6%、保育所の32.8%で、小学校と幼稚園の割合がほぼ同じであった。教育現場で扱われている割合が2倍ほど多いものの、保育所においても3割の学生が体験していることから、幅広い年齢の子どもたちに対応する重要な教材であることが伺える。

制作課題については、粘土遊びの割合が90.7%で大半を占めた。満足度については「満足した」の42.5%、「普通」の25.1%という結果であった。それぞれの理由として「好きなものを自由に作れた」の39%、「粘土べら等の道具を使った」の29.8%、「粘土の触感が良かった」の28.5%の順で、否定的な意見の割合は「においが嫌だった」の28.9%が顕著に高かった。

3) 土粘土を用いた造形表現活動

土粘土を体験した学生は全体の67.7%で3番目の高い割合であった。紙粘土や油粘土ほど高くはないものの、7割の学生が体験したと答えているため、主な教材のひとつであると捉えられる。使用時期においては、小学校での使用率が53%で、中学校では13.5%、幼稚園では12.3%であった。使用率が1割程度の中学校や幼稚園に比べ、小学校では二人に一人が体験しており、小学生の取り扱いが多い粘土であると言える。

制作課題の割合については、焼き物作り（皿、湯飲み、花瓶、マグカップ、箸置き等）の82%が顕著に高く、動物や人物をモチーフとした立体表現よりも、日常で利用できる実用的な作品づくりに多用されていることがわかった。満足度に関する質問についても78.3%の学生が「満足した」と答え、その理由として「好きなものを自由に作れた」の47.3%、「実用的な作品を作れた」の27%で意見の割合が高かった。なお否定的な理由について「作り方が難しかった」を挙げた学生の割合も18%であった。高い満足感を得られている一方で個別的な指導の必要性が伺える。また、割的には低いものの粘土遊びが12.9%で、そのうち71.4%が「満足した」と答えた。

土粘土を用いた造形活動に対しては、指導法の課題はあるものの、ある程度の満足感が得られている結果となった。ただし紙粘土を用いた造形表現活動における課題と同様で、実用的な作品以外の制作課題を工夫しなければならないと言える。特に、幼児や小学校低学年の児童に粘土遊びを体験させ、自然素材である土粘土の魅力をも十分に堪能させなければならないと考える。以前から、子どもの心身の発達に影響を与える素材として重視されてきた土粘土である。時代の変容とともに魅力的な粘土も開発されるなか、改めてその価値を認識し、積極的に表現活動に取り入れていくことも肝要である。

4) 加工粘土〈ブロンズ粘土等〉を用いた造形表現活動

上記の3種類の粘土よりも低い使用率だったのが、加工粘土〈ブロンズ粘土等〉の23.4%であった。使用時期の大きな特徴として、中学校での使用率が85%と顕著に高いことから、中学生が多用している粘土と言える。

制作課題については、“手をつくる”に取り組んだ学生が最も多くて全体の51.7%であった。その満足度は「満足した」の44.8%、「普通」の41.3%、「満足しなかった」の13.7%であった。また“頭像をつくる”では学生全体の26.7%が取り組み、満足度は「満足した」の26.6%、「普通」の46.6%、「満足しなかった」の26.6%となった。また“人物をつくる”では学生全体の21.4%で、それに対する満足度の質問については、「満足した」の16.6%、「普通」の41.6%、「満足しなかった」の41.6%であった。各制作課題によって、満足度にばらつきはあるものの共通するのは「満足しなかった」の回答が多いことである。特に、“人物をつくる”においては4割の学生が不満足であると回答し、これらの制作課題の取り扱いの難しさが浮彫りになった。

人物を対象とした彫塑表現に関しては、心棒作りから荒付け、仕上げの制作工程を踏まないといけないことや表現要素である比例や量感、動勢の理解を深めながらモデリングしなければならないので、中学生にとってはなかなか高度な課題であることは間違いない。小学校からの表現学習を積み上げてこなければ容易ではなく、多くの中学生が壁にぶつかることが予想されるが、青年期に学習しなければならない専門的な表現領域であることから、指導者はより熱意を持って忍耐強く指導していくべきであると考えられる。

5) 小麦粉粘土と樹脂粘土を用いた造形表現活動

調査項目のなかで学生の体験が特に少なかった粘土が、小麦粉粘土の12.9%と樹脂粘土の10.8%であった。まず小麦粉粘土は小学校での使用率が61.2%、幼稚園が32%、保育園が19.3%であった。小学校の割合が幼稚園の2倍程度で、小学生が主に使用している粘土であると言える。また樹脂粘土は小学校での使用率が75%、幼稚園が15.3%であった。こちらも小学校での使用率が高い結果となった。

現状として、両方とも取り扱いが少ない粘土であるが、その背景は異なることが推測できる。まず一般的にあまり知られていない樹脂粘土だが、以前から存在していて教材用としても販売されていた。カラフルな粘土のため着色する必要がなく、手を汚すことなく作品を仕上げることができる優れた粘土であるが、残念ながらコストが割高になる。そのため教材用としてはなかなか普及しにくく、今回の結果につながっていると思われる。

一方で小麦粉粘土は日常で用いる小麦粉を水と混ぜればいいので手軽に取り組み、安価である。以前より幼児教育においては馴染み深いので、ここでの割合に関してはいささか低いように感じる。筆者の推測では、近年、多種多様な粘土が身近なところで割安で購入できるようになってきたので、新たな粘土に移行している可能性がある。また保育所や幼稚園の若手指導者の経験が浅くて、実践に至っていないことも予想される。このような理由が挙げられるが、小麦粉粘土には自然素材ならではの柔らかい手触りと匂い、安全性があるので、粘土遊びなどで積極的に取り入れてもらいたい教材である。

2. 粘土を用いた造形表現活動に満足した時期および理由

最も満足感を得たのは小学校（学生全体の40%）で、次いで幼稚園（学生全体の28%）、保育園（学生全体の20%）、中学校（学生全体の8%）であった。それらの大きな理由として、「好きなものを自由に作れた」という回答が非常に多く、学生全体の5割に達した。このことは〔1. 様々な粘土を用いた造形活動〕の中においても、記述した通りで児童期に満足感を得る重要な理由であることが改めて理解できる。

3. 粘土を用いた造形表現活動に満足しなかった時期および理由

最も不満足だったのは、小学校（学生全体の48%）で、ほぼ半数に及んだ。その理由として、「制作課題が難しくて上手く作れなかった」の26.5%や「手が汚れるのが嫌だった」の14.2%、「油粘土の臭いが嫌だった」の10.2%などが挙げられた。このことは前述の満足感を得ている小学生の割合を上回り、苦手意識を持つ小学生のほうが多く存在することを示している。

中学校の割合については、学生全体の32%であった。その理由として「頭像や手などが上手く作れなかった」の28.7%、「課題に興味を持てなかった」の17.5%などが挙げられた。前述の小学校に比べて割合が低かったのはそもそも粘土の制作活動に取り組んだ学生が少なかったことが原因と考えられる。また幼稚園の8%のうち、2割ほどの学生からは「思った

ように作れなかった」や「油粘土の臭いや触感が嫌い」などの意見もあった。なお保育園は3%という非常に低い割合で満足した学生が多かったことがわかった。

全ての時期において、共通の否定的理由が「油粘土の臭いが嫌だった」である。実態調査の集計後、学生に対し、油粘土について意見を求めると、油粘土の臭いで粘土遊びや制作が嫌になった、という意見が非常に多かった。幼児期から児童期にかけて、必要不可欠な粘土であるものの、子どもたちの反応によっては使い方や代替の教材（小麦粉粘土やふうせん粘土等）を取り入れていくべきであると考えた。

4. 粘土を用いた造形表現活動に関する関心

「粘土遊びや粘土制作は好きか」の質問について、「普通」と答えたのが学生全体の57%で最も多かった。続いて「好き」の32%、「嫌い」の11%であった。事前の予想に反して「嫌い」が1割程度であったことについては少々安心したものの、中立的な意見の「普通」が6割程度もあることが課題である。この割合が少しでも「好き」に変わるような取り組み方を考える必要がある。

次に「粘土遊びや粘土制作を通した保育や教育に、関心があるか」の問いについては、学生の70%が「ある」と回答し、将来の職務に対する意識は高いことがわかった。「粘土遊びや粘土制作は好きか」の質問で、「普通」「嫌い」と答えた学生のうちの半分ぐらいは、「関心がある」と答えていることになるので、自己の好き嫌いとは別に学ぶ意欲はあることがわかった。更に関連の質問で「保育・教育現場で粘土遊びや粘土制作を行うか」について、「行う」と回答したのは学生全体の77%に及び、「どちらでもよい」の22%に大きな差をつけた。「粘土遊びや粘土制作を通した保育や教育に、関心があるか」の回答の割合よりも7%高く、保育・教育現場における粘土の造形表現活動の必要性を自覚している結果になった。

5. 結論

今回の調査を通して、学生の様々な時期における経験や関心などを具体的に把握でき、以下のことが明らかになった。

保育所や幼稚園の活動においては、予想よりも紙粘土の使用が少なかった。安全管理や環境づくり、制作課題の設定など難しい面もあるが、幼児期から積極的に体験させたいものである。また小麦粉粘土や土粘土に関しても取り扱いが少ないので、粘土遊びなどにおいて意欲的に取り入れたいものである。特にこの2つは感触遊び的な要素も味わえるため、未満児の頃から親しませ手指の感覚を養いたい。そして土粘土には泥遊びや砂遊びとは異なる魅力があるため、体全体で十分に体感させたい粘土である。

小学校における彫塑表現活動においては、動物や人物などの具象表現および自己の心情をストレートに表現するような制作課題が少なかった。色々な粘土の制作体験を重ねつつ、手を通して試行錯誤しながら思考することで立体造形の感覚や技能を身につけさせるべきである。

中学校の主な彫塑表現の素材である加工粘土（ブロンズ粘土等）について、全体の8割ほどの学生が体験していなかった。要するに、人物を対象とする具象的な彫塑表現に取り組んでいないと考えられる。調査結果として直接的に出ていないために断言はできないものの、彫塑表現に関する活動を体験せず、他の領域の表現活動に偏っていた可能性もある。実際、この時期の生徒は平面領域（絵画・デザイン等）を好む傾向がある。全体の9割程度の学生が中学校における美術教科で造形表現学習に区切りをつける現状のなか、表現しづらい彫塑表現に取り組むことは意義深い。指導者が丁寧かつ時間をかけながらの個別指導を行うことで中学生の心身の成長と満足感につなげていかなければならないと考える。

最後に制作課題の設定について、学生の意見をまとめると「可愛らしいものを作りたい」「着色したい」「作ったものをプレゼントしたい」「家に飾りたい」などの女性的な意見も目立った。以上の幅広い結果を、今後の授業改善につなげていくものとする。

参考文献

- 1) 「新版 美術科教育の基礎知識」1991年版 監修者 宮脇理 建白社
- 2) 「新版 造形の基礎技法」1993年版 編著者 宮脇理等 建白社
- 3) 「小学校 彫塑学習の手引き」1962年版 文部省 学校図書株式会社

(2013年12月2日 受理)